様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2017～2018
課題番号：１７Ｈ０６７１５

研究課題名（和文）母語と連携する小学校英語教材の開発と実践：中・韓・台の検定教科書分析を通して

研究課題名（英文）Teaching Meterial Development and Practice of Collaborating with First Language in Elementary English Classes: by Analyzing English Textbooks in China, Korea and Taiwan

研究代表者
王　林鋒（Wang, Linfeng）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成・院）・特命助教

研究者番号：７０８０６３２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本と同じく、外国語としての英語教育を扱う中国・韓国・台湾の小学校英語検定教科書分析を通して、母語と連携する小学校英語教材の開発及び実践を行った。対象国の教科書を分析することによって、入門期の英語教材の特性である母語との連携の重要性及び必要性を明らかにした。その結果に基づき、母語と連携する小学校外国語教育の在り方を提案した。さらに、複言語主義の視野を取り入れ、国語の教科書を生かした小学校外国語の教材開発を検討し、協働的授業実践を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　これまでの国内外英語教科書に関する研究が特定の構成要素及び量的な分析に対し、本研究は、ことばの教育を目指す言語教育の観点から母語と連携する内容を考察した。また、日本を含め4つの国と地域を視野に入れ、一体化した比較研究を行うことによって、外国語としての英語教科書の普遍性を導くことが可能となった。さらに、教科書分析から得た結果に基づき、英語入門期における母語との連携を考察し、国語教科書を生かした小学校英語教材開発に関わる提案を提示し、授業実践を試みた。日本の授業実践から東アジア地域国々の英語教科書にも新たな示唆を与えた。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop language teaching materials and enact the teaching practices that incorporating first language into Elementary English classes in Japan. The significance of first language in foreign language education was illustrated by analyzing EFL authorized textbooks in East Asian countries, China, South Korea and Taiwan, which introduced English into Elementary school more than 15 years ago. Given the results of textbook research, a new approach of incorporating first language into Elementary English classes was proposed. Furthermore, language teaching materials were developed in reference with Japanese language textbooks, and collaborative teaching practices were enacted from the perspective of plurilingualism.

研究分野：小学校外国語教育

キーワード：小学校英語　母語と連携する外国語教育　ことばの教育　ことばへの気づき　複言語

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（1）研究の学術的背景

2017 年 3 月に公表された次期学習指導要領の改定案において、小学校英語に関わる重要な改訂が盛り込まれている。2020 年から小学校 3、4 年生が外国語活動を導入、5，6 年生が英語を教科として実施することが明示された。今でも議論し続けている小学校英語の早期化や教科化に伴う課題に対して早急に解決案が求められている。これまで英語教科書がない小学校段階が、本格的に英語学習が始まる重要な入門期となり、次期学習指導要領の実施に向けて、教材開発及び授業実践が急務だと迫られている。

日本における英語教材開発が主に検定英語教科書を対象にした研究である。分析視点は、おおむね構成要素分析、社会文化的分析と歴史的分析の三つに分けられる（王、2014）。2000 年以降の英語教科書研究は、教科書基本構成要素からの分析が中心であった。すなわち、特定の文法項目への注目、語彙のリズムパターン、重要語彙と語彙頻度の検討、発音と音声指導に焦点をあてた分析、題材の選択および国際理解への取り込み、言語活動およびタスクのあり方についての分析が行われてきた。また、教科書の根本的な部分である本文内容のテキストに触れた研究は、単語の難しさ・文の数・長さといったテキストの難易度調査やジャンル・テキストタイプ分析が挙げられる。それによって、教科書における特定の要素の実態と選別方法が明らかにされてきた。さらに、社会文化的な視点に着目した研究も行われてきた。イデオロギーと日本文化論の視点、コーパス研究による文法と語彙の検証、ジェンダー分析といった視点から、教科書が検討されてきた。それによって、教科書の作成に影響を与える社会文化的な要因が述べられてきた。その他、歴史的な軸から見る英語教科書研究が進められている。教科書の資料集成や基礎データベースの作成をはじめ、日本の英語教科書の変遷を振り返りながら、今の教科書編成に示唆を与える歴史的な視野が取り込まれている。日本の小学校英語の行方を検討する中、既に 15 年以上先行している東アジア地域との比較研究が多く見られたが、英語力の比較や英語教育の制度施策の解説にすぎない。

外国語教育において母語排除主義は近年疑問が呈された(Cook,2001,2010;Widdowson,　2003)。このような動向を踏まえ、母語と外国語による言語横断的な言語教育を育成することを目指す理論的な研究は注目されつつある。大津(1989:32)は「母語のほかに外国語という異なった言語体系に関する知識を持っている時には、それらの体系を比較対照することが可能となり、それがメタ言語能力の発達を促進するということに繋がる可能性がある」と説明した。学習者が、母語と外国語の相違を意識することにより、メタ言語能力を活性化し、適切な言語運用の能力を育てることが考えられる。このようなことばへの気づき(大津・窪薗、2008)が言語能力の向上に繋がることが伺える。しかし、母語と外国語を一体化した言語教育の視点から見る英語教育の検討が乏しい。特に入門期において母語との連携に関する教材開発及び授業実践研究が不足している。

（2）これまでの研究成果との関連

上記の研究の背景に基づき、本研究の代表者は中学校一年生を対象にした英語検定教科書の分析を行い、日中比較を通して、単元内容に焦点を当てて、本文テキスト、練習活動及び学習に関わるメッセージを検討してきた。現在、漢字文化圏の国々に漢字を使っている言葉は、日本語と中国語しかない。我々は、表意文字の漢字と異なる表音文字の英語を学習する際、共通する部分があると考えられる。それに、英語を外国語としての環境に置かれる中、学校英語教育の目的は、同じ方向を目指すにも関わらず、様々な言語学習理論や指導法の中、異なる英語学習指導観を選び、それを具体化した教科書の実態を対比しながら、日中英語学習のあり方を明らかにしようと試みた。これまでの研究目的は、日中の英語指導観や学習観による文化的差異を探究するだけではなく、グローバル第二言語としての英語教科書に大いに影響を受けた中国の特徴、およびローカル外国語としての英語教科書を代表する日本の特徴を対比し検討することによって、外国語としての英語教科書の特性及び課題を見出すことである。このアプローチを継承し、今回は英語入門期である小学校の英語教科書に注目し、東アジアを視野に入れ、韓国と台湾を分析対象に加えた。さらに、中等教育における国語科と英語科を繋ぐ教科横断カリキュラムの開発及び授業のアクションリサーチを行ってきた（秋田他 2014、斎藤他 2013）。そこで、外国語としての英語教育において重視されていない言語横断的な研究に向けて、教科書比較分析から得た知見を活かし、日本の小学校英語教材開発に提案し、授業実践を試みる。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本と同じく、外国語としての英語教育を扱う中国・韓国・台湾の小学校英語検定教科書を分析することによって、入門期の英語教材の特性である母語との連携の重要性及び必要性を明らかにする。その結果に基づき、母語と連携する小学校外国語教育の在り方を提案する。さらに、複言語主義の視野を取り入れ、国語の教科書を生かした小学校外国語の教材開発を検討し、協働的授業実践を試みる。

３．研究の方法

教科書分析において①これまで開発してきた分析視点を単元分析の中に再構築した枠組みを用いてデータ分析、②教科書が実際に使われる現場に入り、授業実践事例を通して観察、から前記の目的達成を図る。①では、独自組み立てた教科書分析の視点として単元を構成する三つの部分である「学習に関わるメッセージ」、「本文テキスト」、「練習活動」に対してそれぞれに分析を行う。②では、分析したデータを参考とし、授業事例を観察し、授業の展開と共に、教

科書や他の教材の使い方を捉える。よって、年次計画としては、平成 29 年度には、①に関する分析視点を再構築した枠組みに従い、同じテーマの単元を抽出し、対象国の教科書分析を行う。平成 30 年度には、②対象単元の授業事例を観察することで授業の展開と共に教科書の使用や他教材の活用について検討を行う。

４．研究成果

本研究の結果、既に 15 年以上小学校外国語教育が先行している東アジア地域である中国・韓国・台湾の現行教科書を分析することを通して、入門期の小学校英語教材が母語との連携という視点が欠如していることが明らかになった。本研究では、小学校外国語教育において、ことばの気づきを促す国語・英語・中国語の連携を図った教材開発を行い、授業実践を行った。

（1）国語の教科書を生かした外国語教育の教材開発

ここでは、小学校国語教科書（光村図書）に基づき、特に中国語と関連づけられる題材を抜き出し、メタ文法能力の四領域に従って分類する。分類した結果が表１である。

音韻への気づきとは、頭韻や脚韻への気づき、音素の結合や代替、韻をふんだ言葉遊びなどが理解できることを指す。一年生から六年生まで音韻への気づき分類が学年ごとに配置されている。音韻への気づきは概ね二つの種類に分けられる。一つは、韻を生かす言葉遊び（10 箇所）、もう一つは、音読みや訓読みといった漢字の読み方（7 箇所）である。韻を生かす言葉の遊びについては、しゃれ、回文、しりとり、短歌や俳句を鑑賞したり、創作したりする活動が組まれる。これらの活動に似た中国語のことばの遊びを加え、日本語特有の音韻を楽しみながら、各言語の発音の特徴と豊かさを認識できる。漢字の読み方については、中国語の発音と同じ音読みの漢字をいくつか提示し、その関連性に気づかせる。中国語と日本語の両方に存在する同音字（同じ読み方で違う漢字）や多音字（同じ漢字で違う読み方）を選び、言語としての共通性や違いを考えさせる。このような活動により、音韻に対する識別力が高められ、読解力の発達に繋がることが考えられる。

単語への気づきとは、文の構成要素である単語を理解する能力を示す。単語に関連する内容の多くは、漢字自体の構成や漢字間の組み合わせである。漢字は、中国語から伝わったものであり、現在、日本語と中国語しか使われていない文字である。この意味で、漢字に関わる項目は中国語と非常に結び付けやすい。むしろ、中国語と結びつけたほうが、漢字の理解を深めることや、後続する漢文の学習や中国語を学ぶ素地を養うことが期待できる。特に複合語と熟語の構造は文や節を構成する重要な要素であり、高度な中国語や日本語能力の育成に欠かせない。二つの言語を例示して対比させることで、共通点を見出す活動が学習者に文構成を深く考える機会を与える。漢字と違い、日本語独自のカタカナ英語を紹介する内容も見られた。漢字とカタカナ語が共存することが日本語の大きな特徴の一つであることを学習者に気づかせるものである。

文法への気づきとは、言語の正確性や正当性を判断する力のことを指す。語形や語順だけではなく、品詞など文法構造への気づきも指す。主語や述語を認識する力、品詞を分けて構造的に認識する力が含まれる。一年生から五年生にかけて、７か所の文法への気づきが主語、述語、修飾語に集中している。語順や係り受け修飾関係も関連している。文型のパターンと対応させながら、英語や中国語が SVO 型、日本語や韓国語が SOV 型、他の組み合わせ（VSO、OSV）で他の言語も存在することを説明し、複数の言語の語順の違いに気づかせる。これにより、個別言語を超えた言語が共通する文法の枠組を学習者に与えることができる。SVO の代わりに、主語や動詞、目的語など学習者の理解度に相応する言葉で例文を提示しながら説明することが望ましい。係り受け修飾関係は、小学校以降に学ぶ長文の基礎を築く文法項目の一つと言える。６年生の教科書に文法への気づきに分類できる項目は見受けられないが、小学校高学年においても語・句・節レベルの係り受け修飾関係を意識させる活動を取り入れることが望ましい。

運用への気づきとは、状況に応じ言語を適切に活用する力、円滑なコミュニケーションができる能力を指す。小学校の国語教科書に現れた運用への気づきは、三通りある。まず、相手によって敬語や世代間の言葉を選び発信することの重要性、日本で使う文字の使い分けを意識させることが、言語使用の状況に対する気づきである。中国語で使われる丁寧語を紹介し、言語間が共通することばの普遍性を気づかせる。そして、物事を豊かに表現するには、ことわざ、慣用語、擬音語・擬態語・比喩を用いることができる。同じ現象に対し、それぞれの言語に似ている表現や異なる表現があり、それに気づかせることにより、言語がもつ社会文化性の多様性を知ることができる。文学の性質を有する詩・古典・論語・漢詩は運用への気づき領域に分類した。その理由は、文学が高度な言語運用能力を資するからである。これらの文学作品を鑑賞することによって、それぞれの言葉が表す世界とその言葉の奥深さに気づかせる。

表１：中国語と関連づけられる活動

巻	頁	タイトル	内容	分類
１年上	40	文を作ろう	主語と動詞	文法への気づき
	76	「は」を「へ」を使おう	主語、目的語、動詞	文法への気づき
	112	カタカナを見つけよう	カタカナ英語	単語への気づき
１年下	22	漢字の話	象形文字	単語への気づき
	36	カタカナを書こう	カタカナ英語	単語への気づき
	72	カタカナの形	カタカナ英語	単語への気づき

	88 102	ことばを楽しもう 似ている漢字	言語遊び 漢字の形	音韻への気づき 単語への気づき
２年上	48 102	同じ部分を持つ漢字 言葉遊びをしよう	漢字の構成 頭韻で始まる文づくり	単語への気づき 音韻への気づき
２年下	21 23 34 52 74 117	主語と述語 漢字の読み方 カタカナで書くことば 似た意味の言葉、反対の意味の言葉 様子を表す言葉 ことばを楽しもう	何（誰）はなんだ（どうする） 一つの漢字で多様な読み方 擬音・外来 同義・反対語 擬音・擬態・たとえ・修飾 回文	文法への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 言語への気づき 運用への気づき 音韻への気づき
３年上	28 40 51 116 122	漢字の音と訓 言葉で遊ぼう 俳句を楽しもう へんとつくり ローマ字	音読み、訓読み しゃれ、回文、アナグラム ５・７・５の１７音 漢字の構成 ローマ字表記	音韻への気づき 運用への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 単語への気づき
３年下	26 44 46 68 94 96	修飾語 短歌を楽しもう 漢字の意味 言葉を分類する 音訓かるた ことわざについて調べよう	何をだれにどこでどんな ５・７・５・７・７の３１音 同じ発音で違う漢字 物事、様子、動き 音読みと訓読みの歌作り もの、表現、意味	文法への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 文法への気づき 音韻への気づき 運用への気づき
４年上	8 26 52 64 106	ばらばらことばを聞き取ろう 漢字の組み立て 短歌・俳句に親しもう いろいろな意味をもつ言葉 漢字しりとり	音の聞き取り 漢字の構成 短歌・俳句 同じかなで多様な意味 脚韻で始まる漢字	音韻への気づき 単語への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 音韻への気づき
４年下	32 48 64 92 102	慣用句 短歌・俳句に親しもう 文と文をつなぐことば 熟語の意味 間違えやすい漢字	馬が合う 短歌・俳句 つなぎことばの働き 漢字の組み合わせ：似た意味、反対意味、修飾、 同じひらがなで違う漢字	運用への気づき 音韻への気づき 文法への気づき 単語への気づき 単語への気づき
５年	42 56 68 96 98 102 112 154 156 170 174 176 195 223	漢字の成り立ち 古典の世界 敬語 暗号解読 日常を十七音で 和語・漢語・外来語 漢字の読み方と使い方 同じ読み方の漢字 文の組み立て 古典の世界 分かりやすい文をつくろう 詩の楽しみ方を見つけよう 複合語 方言と共通語	象形文字 古典文章 尊敬語、謙譲語 記号の音に合う漢字 俳句を作ろう それぞれの由来 多音字 厚い熱い暑い 二つの主語、述語、修飾 論語、漢詩 主語と述語を対応させる 詩の種類、特徴 複合語の種類、特徴 日本言語地図	単語への気づき 運用への気づき 運用への気づき 音韻への気づき 音韻への気づき 単語への気づき 音韻への気づき 音韻への気づき 文法への気づき 運用への気づき 運用への気づき 運用への気づき 単語への気づき 運用への気づき
６年	52 86 106 151 168	漢字の形と音・意味 熟語の成り立ち 生活の中の言葉 漢字を正しく使えるように 日本で使う文字	同じ部分で同じ音、同じ部分と意味 熟語の構造・構成 敬語、世代間言葉遣い 同訓異字、音読みの場合 仮名の由来、万葉仮名、日本語の表記、ローマ字との関わり	単語への気づき 単語への気づき 運用への気づき 音韻への気づき 運用への気づき

（2）教科書を生かした母語と連携する外国語活動の授業実践

この小学校の授業実践は、当時、教職大学院教職専門性開発コース M3 の池田院生との協働実践である。池田院生は、中・高の英語及び中国語の教員免許を持っていたが、小学校の教員免許を取得しようと教職大学院に入学し、公立小学校で長期インターンシップをしていた。彼が外国語教育に興味を持っていることを知り、中国の小学校英語の教科書 12 冊とともに実際の授業映像を渡し、院生同士にも共有するように声をかけた。彼は、ずっと、英語力及び中国語力を活かした小学校の外国語活動の授業実践をしたいと思っていた。小学校外国語の授業に挑戦する院生が少ない中、私は「やってみよう」といつも声掛けしていた。授業実践ができるのを知ったのは、2017 年 10 月だった。2018 年 1 月 17 日に 4 年生の外国語活動の時間に池田院生が授業実践をすることが決まった。私は、特別ゲストとして授業に関わることになった。

１）「えー中国語！中国語！」とざわつき、興味を抱く

本時で何を学ぶかを知る場面。冬の風景の授業で、白いモノを見たら冬を感じるとあったので、「白」という漢字に注目して勉強するという発想だった。国語の冬の風景の授業でどんなことばがでてきたかという先生の問いかけに対して、子どもたちは、雪合戦、雪かき、雪だるま、と答えた。「共通しているものはなんだろう」と聞くと、「雪」と出た。さらに、「雪は何色」と聞いたら、やっと「白」にたどり着いた。そこで、「白」で始まる漢字の組み合わせから、日本語・英語・中国語について考えようという本時のめあてを黒板に貼った。めあてを貼った直後、子どもたちは、自発的に読み始めた。みんな「えー中国語！中国語！」と隣の人と一気に話し始めた。

２）白イルカ、白目、白ほうと次々に書き単語に出会う

子どもたちを 4 人グループに分け、「白で始まる漢字を集めてほしい」と画用紙を配布し、3 分間を設定した。数多く書くことを目指して、各グループは作戦を取っていた。辞書で調べて、白の漢字を探すグループ、社会科の教科書を取り出して、地方の名前や神社の名前から単語を取るグループ、「白山」がはくさん、しらやまの二つの発音ができることから、読み方まで書くグループも出た。8 班の内、少ない班は 4 つ、多い班は 8 つを探すことができた。

各班が書いた画用紙を黒板に貼り、共通することばから、「白鳥」と「白紙」を取り上げ、さらに池田院生が事前に準備した「白馬」と「白旗」で考えようとすることにした。既習単語から予想していた「白馬」と「白旗」が子どもたちから出なかった。ここでは、柔軟に子どもたちの答えに変えることも考えられたが、次の授業展開で扱う三つの言語を比較するのに適例だということから、こちらが考えた 2 つの単語を加えることにした。

３）白は英語でホワイト、中国語でバイということを発見する

「白鳥」「白紙」「白馬」「白旗」を黒板に書き、それぞれの英語を全体共有で確認した。子どもたちは、白を、英語でホワイトというのを知っていた。白鳥をホワイト・バードといった子どもたちに、「バードとも言う。でもここでは、スワンって書く」と池田院生は言った。理由は、ホワイト・バードだと白い鳥を意味し、白鳥であるスワンを特定できないから、語彙の混乱を防ぐためあえてスワンにしたとのことである。実は、当日の事後授業研究会で小林和雄先生が直訳すると間違いが生じる場合もあると指摘した。一方、間違いから学ぶチャンスだったと振り返った。4 つの単語の英語（white swan、white paper、 white horse、 white flag）を確認し、「私たちが考えた英語が外国人に本当に通じると思いますか」と問いかけ、子どもたちに挙手してもらった。彼らはほとんど通じないと思っていた。私が、「全部通じます」と答えると、半数以上の子どもたちが驚いていた。続いて、4 つの単語の中国語での言い方を、私が解説した。多くの子どもたちは、私の真似をして、自発的に中国語を発音していた。せっかく興味を持ってくれていたが、私は大きなミスをしてしまったことに気づいた。それは、該当する中国語の漢字ではなく、ピンインを音訳したカタカナを黒板に書いたことであった。そのことに気づき、日本語を指して、「中国語も同じ漢字、これも中国語になっています」と言い足した。池田院生は、「中国語では、全部漢字です」と補足し、子どもたちの反応を記録した。

子どもたちが全部漢字の中国語に対して、興味を示してくれたことから、池田院生は臨機応変に「私は先生です」という文の日本語表記と中国語表記を提示し、日本語の文字が中国でも通じることを説明した。

４）疑問、分かったこと、気づいたことを共有する

ここまで行い、気づいたことをペアで考える時間を設けた。最初は「わからーん」と言い出す子がいたが、徐々にペアワークで活発に話すようになった。意見を共有する時間に、子どもたちから以下の意見が出た。「韓国や北朝鮮でも漢字を使っています。韓国語は、日本語と読み方は違うけど、中国語だと読み方は同じ？」;「日本語の「一」の字は、中国語でも同じなの？」;「日本語も、中国語も、英語も、最初が一緒。」。この最後の発言を拾い、池田院生は、子どもたちとの会話によって「色+動物/物」が 1 つの単語になっていることへの気づきを導いた。

５）漢字づくりに挑戦してみる

漢字づくりに挑戦する前に、池田院生が二つの例「青空」「緑茶」を出した。青→青空→blue sky→青空（qīng kōng）；緑→緑茶→green tea→緑茶（lǜ chá）のように板書した。これらは、「色+動物/物」になっていることを伝えると、子どもたちの気づきの声が上がってきた。「色と何かを組み合わせて、言葉を見つけてみたりして下さい」と指示し、ワークシートを配布した。子どもたちが書いている間に、池田院生が机間支援をしながら、見つけたよい例を全員と共有していた。最後に、振り返り文を書かせて、授業を終えた。

32 人の子どもたちは、120 個の漢字のことばが書けた。「色+動物/物」に限定したことで、子

どもたちの発想を制限したのではないかと心配していたが、脳みそを総動員して、たくさんの言葉を書いてくれた。個人の狙いとしては、オリジナルな単語や言葉を作ることを目指していた。語と語の組み合わせで新しいことばができることに気づき、自分なりに新しいことばを作ってみる創作活動をしたかった。だが、授業者の池田院生が、範囲が広すぎると分からなくなる、4 年生にとって難しい、という意見を私は尊重した。子どもたちは、それぞれ、自分の言葉で多様な視点から授業を振り返っていた。子どもたちの気持ちに応えながら、全員のワークシートにコメントを書いて返した。

６）振り返り文から授業を再考する

振り返り文の中にあった、ことばの仕組みに関する記述は、興味深かった。「色＋物で言葉ができることを初めて知りました。日本語は白、英語は white, 中国語は bai など、白は外国語でも決まっているんだなあと思いました。」;「日本語は漢字とひらがながまじって“今から遊びにいきます”とかになるけど、中国語は全て漢字なので、びっくりしました。」;「白鳥で中国語だったら別の意味のばいやニャオ（白鳥の中国語発音）べつべつの意味をつなげてすると白鳥と読めるなんてびっくりしました。」;「日本語には白でも読み方はいろいろあるけど英語と中国語はよみかたが 1 種類しかないのが疑問におもいました。」;「赤色や青色などの色はなにかと組み合わせて英語や中国語にできるなと思いました。」といった共通する語と語の組み合わせだけではなく、文づくりの構造、発音体系、日本語の特徴である膠着語まで考えた子どもがいた。

また、複数の言語を比較する視点は、大半の記述に見られた。「中国語、英語は日本と同じ最初の色とかの意味は同じということが分かりました。でもなんで外国や中国の字は全然違うかなと思いました。」;「中国の漢字はなんで日本の漢字と違うのかなと思いました。」;「中国のほとんどが最後に「ー」になることが分かりました。ワン先生とわたしの滑舌が全然違いました。」といった複数の言語の違いだけではなく、共通点もあることに気づいていた。

外国語への興味を示した記述は一番多かった。「中国語は日本語とすこしにている部分があることが分かりました。いただきます や こんにちは はどうやっているのかしりたいです。」;「中国では全部の文字が漢字なんだなとおもい、ぼくも中国の字をならってみたいです。発音もむずかしいからすごいです。」;「もっと中国語をしりたい」;「漢字は日本、中国のどっちからきたのか疑問です」;「中国でもだいたいはなんてかいてあるかわかるんだなと思います。」といった意外に中国語の漢字もわかる、もっと外国語を知りたいという気持ちが書かれていた。

今回の研究では，小学校外国語教育の性質を「ことばの教育」として捉え、複言語主義の視野を取り入れ、ことばへの気づきを意識した国語・英語・中国語が連携する授業の可能性を探ってみた。「ことばの教育」とは、ことばの面白さや豊かさ、不思議さに気づかせ、ことばへの気づきを大切にした言語能力の育成である。小学校においては、母語や外国語を対象にことばへの気づきを培い、言語に対して意識的になることで、母語と外国語を効果的な運用を可能にすることが期待される。「ことばの教育」を実現するためには、国語教育と外国語教育の連携が必要となる。筆者が３年間に渡り携わった中等教育における国語科と英語科連携のプロジェクトの実践から、小学校の外国語教育におけることばの気づきを促す国語・英語・中国語を連携する教材開発及び授業実践を試みた。今後、母語と連携する日本型小学校外国語のカリキュラムの構築に向け、協働的授業実践を蓄積していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①王　林鋒（2019）「母語と連携する外国語教育の教材開発に関わる協働的実践研究：教科書を生かした授業実践事例を通して」『教師教育研究』第 12 号、印刷中　査読無

②王　林鋒（2017）「小学校外国語教育における国語・英語・中国語の連携の可能性:ことばへの気づきに着目して」『福井大学初等教育研究』第 3 号、pp25-32.　査読無

〔学会発表〕（計 6 件）

①Wang, Linfeng. (2018). Reflective Lesson Study: Professional Development of Pre-service and In-service Teachers. *World Association of Lesson Studies* 2018 年 11 月 中國・北京

②Wang, Linfeng (2018). Incorporating L1 in EFL Classes in Primary Schools 全国英語教育学会 2018 年 8 月 日本・京都.

③Wang, Linfeng. (2018). How Mother Tongues Are Dealt with in Elementary English Textbooks in China mainland, Taiwan, Japan, and South Korea. *The Comparative Education Society of Asia (CESA)* 2018 年 5 月 カンボジア・シェムリアップ.

④Wang, Linfeng (2018). Collaboration between L1 and EFL Education in Japan. *The IATEFL International Annual Conference and Exhibition* 2018 年 4 月イギリス・ブライトン.

⑤Wang, Linfeng (2017). Student Teachers' Reflective Practice in Lesson Study in Japanese Primary Schools. *International Conference of School as Learning Community* 2017 年 10 月 韓国・慶尙南道.

６．研究組織

(1)研究分担者　なし

(2)研究協力者　なし